

群 教 セ	G05 - 03
	平16. 218集

日本の音楽を豊かに感じ取れる児童の育成

—環境音を聴く活動を鑑賞と表現の活動に関連させて—

長期研修員 遠藤 美由紀

《研究の概要》

本研究は、環境音を聴く活動を鑑賞と表現の活動に関連させて、日本の音楽を豊かに感じ取れる児童を育成しようとするものである。具体的には、環境音を聴いて自由な発想で思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行い、感じたことを交流しながら聴き方の視点や感じ方を広げる。さらに、この活動を鑑賞と表現の活動に関連させていく。これらの活動を通して、児童が日本の音楽を身近に感じながら豊かに感じ取れるようにした。

【キーワード：音楽—小 日本の音楽 環境音 鑑賞と表現の活動】

I 主題設定の理由

今後ますます国際化が進む中で、自国の文化や伝統について理解し尊重する態度を育てていくことが強く求められている。なかでも音楽は、国や地域の文化や伝統を表すものである。したがって、音楽科において、日本の音楽に親しみや味わいを感じ、日本の音楽を大切にしようとする心を育てることは、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成するための大きな課題であるといえよう。

しかし、本校児童の実態調査では、約3分の1程の児童が日本の音楽への興味・関心が低いことが分かった。その多くは、どのような音楽が日本の音楽なのか分からないとも答えている。これは、これまでの日本の音楽教育が西洋の音楽を基盤としてきたため、日本の音楽に対して親しみを感じる機会が少なかったことや、生活や遊びを通して日本の音楽に触れる機会が少なくなってきたということが原因であろう。このような実態をふまえて、日本の音楽を身近な音楽として親しみや味わいを感じられるようにし、大切にしようとする心を育てることが必要であると考え。また、日本の音楽は、自然の様子や生活の中の様々な思いから生まれ、独特な味わいを持ちながら今日まで受け継がれてきた。我々は日本で生活する中で、このような独特な味わいを感じ取る感性を、無意識のうちに身に付けている。したがって、心に内在している感性を磨き育てるような学習の内容や方法により、日本の音楽を豊かに感じ取ることができるようになりたいと考えた。

そこで、本研究において、自然や生活の中の様々な環境音を聴く活動を鑑賞と表現の活動に取り入れることにした。環境音を聴く活動は、音を聴いてその音の特質から思いを浮かべたり風景を想像したりするなど、自分の身近な事柄と関連させ、自由にイメージをふくらませながら音を感じ取ったりしていくものである。このような活動を、日本の音楽の鑑賞と表現の活動に関連させていけば、日本の音楽のもつ独特な味わいを心で感じ取ることができ、身近な音楽として親しみを感じられるであろうと考えた。また、自分の好きな環境音から思いを浮かべたり風景を想像したりして、鑑賞した音楽をもとに工夫して表現すれば、音楽とのかかわりが深まり、音楽を深く感じ取れるようになるであろう。

以上のことから、環境音を聴く活動を鑑賞と表現の活動に関連させて、音や音楽のイメージを広げながら心で感じ取ったり、表現したりできるようにすれば、日本の音楽を豊かに感じ取れる児童を育てることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

日本の音楽の鑑賞と表現の活動に、環境音を聴く活動を関連させることにより、日本の音楽を豊かに感じ取れることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 環境音を聴く段階で、いろいろな環境音を意識して聴き、思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行い、感じたことを友達と交流すれば、音を聴く楽しさを感じたり音を聴くことへの関心が高まったりするであろう。
- 2 日本の音楽を鑑賞する段階で、環境音を聴く活動と同じように思いを浮かべたり風景を想像したりしながら聴き、友達と交流して感じたことをまとめれば、聴き方の視点や感じ方が広がり、イメージをふくらませながら心で感じ取ることができるだろう。
- 3 日本の音楽を表現する段階で、環境音から浮かべた思いや想像した風景を、歌や楽器で工夫して表現し、表現したものを聴き合えば、日本の音楽を身近な音楽としてかかわりながら深く感じ取ることができるだろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 日本の音楽を豊かに感じ取れる児童とは

日本の音楽を豊かに感じ取れる児童とは、次の三つの内容を図1のように段階的に行うことで、日本の音楽を広く深く、心で感じ取ることができる児童のことである。

① 環境音や日本の音楽を聴き、思いを浮かべたり風景を想像したりしながら心で感じ取る。

日本の音楽は、自然や生活の中から生まれ、風土や言語などの中で人々によって長い時間をかけて様々な音楽との関連をもちながら、様々な変遷を経て生活とともに存続してきた。したがって、日本の音楽を自然や生活とかかわりをもたせて身近な音楽として親しみを感じられるように、環境音を聴く活動を関連させたいと考えた。また、日本の音楽は、リズム、メロディー、ハーモニーなどの曲の構造的な美しさを追求する西洋音楽とは異なり、一つの音に様々な音色や音質の変化、音の揺らぎなどを求めるといふ、日本独特の趣や美しさをもっている。したがって、そのような特徴をとらえながら、思いを浮かべたり風景を想像したりして、イメージを広げながら聴き、音楽を心で感じ取れるようにするのである。

② 感じ取ったことを友達と交流し、音楽の聴き方の視点や感じ方を広げる。

これは、音楽を聴いて感じたことを伝え合うという交流活動を取り入れ、音楽の聴き方の視点や感じ方を広げるものである。音楽の感じ方は様々である。したがって、交流して一人一人

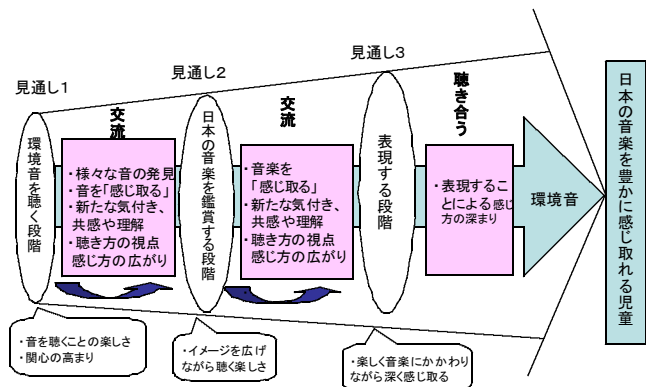


図1 研究構想図

の音や音楽に対する異なった感じ方に触れることによって、新たな発見や気づきから、違う視点に立って音楽を感じ取ることができると思われる。聴き方の視点や感じ方を広げる交流の方法として、音や音楽を聴いて感じ取ったことを思いつくまま短い言葉で付箋紙に書き、グループで持ち寄った付箋紙を内容ごとにまとめる。付箋紙を見ながら、友達せんの感じ方に共感したり、自分が感じられなかったことを発見したりできることから、もう一度聴いてみたいという意欲も生まれるであろう。そして、新たな発見や気づきをもとに再度鑑賞することによって、更に新しいイメージを広げながら聴くことができると考える。

③ 自分たちの思いを表現することで日本の音楽を深く感じ取る。

環境音から感じた思いや想像した風景を、日本の音楽で表現することで、自分たちの思いを聴き手に伝えるために、どのように工夫して表現すればよいかということを考えながら歌詞を考えたり楽器を演奏したりするであろう。したがって、自分たちの表現意図を試行錯誤しながら工夫し、より深く音楽にかかわることから、より深く音楽を感じ取ることにつながると思う。

(2) 環境音を聴く活動を鑑賞と表現の活動に関連させるとは

本研究での環境音とは、私たちを取り巻く自然や生活を営む上で生まれた身の回りせみにある様々な音と、日本の音を合わせて環境音と称することとする。日本の音とは、生活の中にも取り入れられている、日本の文化として生まれ昔から親しまれてきた日本独特の音とし、風鈴、ししおどし、水琴窟、お寺の鐘等、環境省が選んだ『日本の音風景100選』を参考にしたものである。

環境音を聴く活動とは、環境音を意識して聴き、音の特質から思いを浮かべたり風景を想像したりするなど、イメージをふくらませて、音を心で感じ取る活動である。

我々の生活や自然の中には様々な環境音があるが、それらの音を普段はあまり意識して聴いていない。しかし、耳を澄ませて注意深く聴くと、意識していなかった様々な音が聞こえてくる。そこで、まず、生活の中で何気なく耳にしている様々な音の発見に気づき、音を聴くことへの関心を高めていく。また、日本には四季折々の豊かな自然や独自の風土があり、蝉時雨に夏を感じたり、風鈴の音に涼しさを感じたり、虫の声を深く味わったりするなど、自然の中の様々な音を聴いて安らぎを感じたり楽しんだりしている。さらに、楽器の音に含まれる非楽音をも響きとし、静寂にも価値をもつという音の文化をもっている。このようなことから、自然の音や日本の音を聴き、日本の豊かな自然や文化を意識しながら個々の音をもつ暖かさや柔らかさなどの音質を感じ取れるようにしていく。そして、日本の音楽の鑑賞においても環境音を聴く活動と同じように、音楽の中の音を意識して聴いたり、身近な事柄に置き換えながら、自由に思いを浮かべたり風景を想像したりして、心で感じながら聴き、日本の音楽を身近な音楽として親しみがもてるようにしていく。

環境音を表現の活動に関連させるとは、環境音から浮かべた思いや想像した風景を歌詞にしたり楽器で表現したりすることで、自分が表現しようとする音を選んだり試したりして、音や音楽と深くかわりかかるともてるようにするのである。そして、表現したものを聴き合うことで友達の表現意図を感じ取り、さらに自分のイメージを広げながら聴くことができるようにしたいと考えた。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い、検証する。

(1) 授業実践計画

対象	太田市立鳥之郷小学校 6年1組（男16名、女21名 計37名）	題材名	日本の音楽を心で感じ取ろう
期間	平成16年10月（8時間）	授業者	長期研修員 遠藤 美由紀

(2) 抽出児童

A 男	音楽の学習全般に苦手意識があり、日本の音楽に触れた経験が少ないため、あまり興味を示していない。しかし、好きな音や心が安まる音をたくさんあげているので、音を感じ取る楽しさを味わうことを通して、日本の音楽に興味をもてるようにつなげていきたい。
B 子	歌や器楽、鑑賞など音楽全般にわたって興味・関心が高いが、日本の音楽についてはあまり興味を示していない。日本の音や和楽器の音色を感じ取らせることを通して、日本の音楽に興味をもてるようにしていきたい。そしていろいろな表現方法についての発想を引き出しながら、豊かに音楽を感じ取らせたい。

(3) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	生活の音や自然の音を意識して聴いて、思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行い、感じたことを友達と交流したことは、音を聴く楽しさを感じたり、音を聴くことへの関心を高めたりすることに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> 授業における観察 付箋紙に書かれた内容 ワークシートへの記述の分析 自己評価の分析 事前アンケートと事後アンケートとの比較
見通し2	思いを浮かべたり風景を想像したりしながら日本の音楽を聴き、友達と交流しまとめたことは、聴き方の視点や感じ方を広げ、イメージをふくらませながら心で感じ取ることに有効であったか。	
見通し3	環境音から浮かべた思いや想像した風景を越天楽今様の歌詞に当てはめ、歌や楽器で工夫して表現し、表現したものを聴き合ったことは、日本の音楽を身近な音楽としてとらえ楽しくかかわりながら深く感じ取るために有効であったか。	

V 研究の展開

1 題材及び題材の考察

題材	「日本の音楽を心で感じ取ろう」
教材	鑑賞教材：「春の海」、雅楽「越天楽」 表現教材：「越天楽今様」 <small>さい</small> 補助教材：環境音（河原で鳴く虫の声、水琴窟、風鈴、蝉時雨、潮騒、お寺の鐘の音）
<p>本題材は、環境音を聴く活動を取り入れて、それを鑑賞教材や表現教材に生かしながら日本の音楽を心で感じ取れるように意図して構成したものである。補助教材の環境音については、児童にとって生活と密着し身近に感じる音や、日本の音文化を象徴するような音を設定した。</p> <p>「春の海」は、宮城道雄が箏曲の伝統に根ざしながら洋楽的な要素を取り入れて作曲した、箏と尺八の二重奏曲である。描写的な内容で、春の海の波やかもめの声などを描写した穏やかな部分と、陽気な舟歌と春霞ののどかな感じを巧みに織り交ぜたテンポの速い部分で構成されている。したがって、環境音を聴いて身に付けた音の聴き方や感じ方を生かして、自分なりの情景描写をしながら聴くことに適した教材である。</p> <p>また、雅楽「越天楽」は平安時代の初期に宮廷の儀式や典礼のための音楽として編作曲されたものであり、雅楽でしか使われない独自の楽器や演奏の形がある。そこで、日本の音楽に親しむ経験の少ない児童が、雅楽を親しみをもって鑑賞できるようにするために、環境音を聴く活動で身に付けた音の聴き方や感じ方を生かして聴くことで、児童の感性が磨かれ、より身近な音楽として価値を感じられるようになることを考える。表現教材として扱う「越天楽今様」は雅楽「越天楽」の旋律に歌詞を付けたものである。したがって、この2曲は音楽の成立上、また鑑賞と表現の活動の関連を図る上でも密接な関係があるので、独立して扱うのではなく、関連させながら扱うことで効果を見いだすことができると考える。雅楽「越天楽」の鑑賞をもとに、自分たちの好きな環境音から浮かべた思いや想像した風景を表現できるような教材として「越天楽今様」を扱えば、音楽のイメージを具体化でき、日本の音楽の感じ方を深められると考える。</p> <p>以上のような理由から、本題材を設定した。</p>	

2 目標及び評価規準

目標	環境音や日本の音楽を聴くことを通して、様々な環境音や日本の音楽に関心をもち、感じ取ったことからイメージを広げたり、それに合った音楽表現を工夫したりして音楽と楽しくかかわりながら、日本の音楽を心で感じ取ることができる。			
観点	音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	様々な環境音に関心をもち、進んで聴き取ったり感じ取ったりし、それを鑑賞や表現の活動に生かそうとしている。	環境音や日本の音楽を聴いて感じ取ったことから自分のイメージをもち、それらを生かした多様な表現の仕方を工夫している。	自由な発想を生かして表現し、自分のイメージに合った音楽表現を楽しむなど、工夫して音楽をつくっている。	日本の音楽を、楽器の音色に気付いたりイメージを広げたりしながら全体的に味わって聴く。

3 指導と評価の計画(全8時間)

段階	時間	◎学習のねらい ○学習内容及び学習活動	支援及び指導上の留意点	評価の観点、具体的評価規準及び評価方法 [] ◎十分満足できると判断するキーワード
環境音を聴く	1	◎生活音や自然の音を意識して聴き、音から思いや風景を浮かべたりし、感じたことを交流する ○生活音や自然の音を聴く。 ○音を聴いて、思いを浮かべたり風景を想像したりし、感じたことを短い言葉で付箋紙に書く。 ○気付いたことや発見したことをもとに再度音を聴き、新たに感じ取ったことをワークシートに書く。	○音を聴いて感じた思いや浮かぶ風景をたくさん書けるよう、思いつくままに短い言葉で付箋紙に書くように伝える。 ○友達の見解を参考にしながら再度確認して注意深く聴くように声をかける。	関心：様々な環境音を聴くことに関心を持ち、進んでいろいろな音を聞き取ろうとしている。[表情や態度の観察][発言][ワークシートの記述] ◎友達の見解を意欲的に聴き、たくさんのメモ 感受：様々な環境音の音質の違いや特徴を感じ取り、音や音楽から自分のイメージをもっている。[表情や態度][ワークシート] ◎多様な視点からの感じ方
見直し	2	◎自然の音や日本の音を聴いて感じたことを交流する ○音を聴いて、思いを浮かべたり風景を想像したりし、感じたことを短い言葉で付箋紙に書く。 ○グループで感じ取ったことを交流し内容ごとにまとめる。 ○気付いたことや発見したことをもとに再度音を聴き、新たに感じ取ったことをワークシートに書く。	○様々な感じ方を内容ごとにまとめられるよう、まとめ方の視点を提示する。 ○特に自分の感じ方と違うものに注目させて、再度聴く時の新たな視点にできるようにする。 ○交流によって感じ方の広がりや生まれたことに注目できるようにする。	関心：様々な環境音を聴くことに関心を持ち、進んで聞き取ろうとしている。[表情や態度の観察][交流の様子][ワークシートの記述] ◎集中する様子や楽しさの様子やたくさんの記述 感受：感じたことを友達と話し合うことによって、様々な感じ方があることを知るとともに、感じ方を広げようとしている。[交流の様子][ワークシートの記述] ◎友達から多数の発見
日本の音楽を鑑賞する	3	◎「春の海」を聴いて感じたことを交流し、感じ方を広げる ○「春の海」を聴いて楽器の音や曲の感じから思いを浮かべたり風景を想像したりし、感じたことを短い言葉で付箋紙に書く。 ○グループで交流し内容ごとにまとめる。 ○気付いたことや発見したことをもとに再度音楽を聴き、新たに感じ取ったことをワークシートに書く。	○様々な感じ方を内容ごとにまとめられるよう、まとめ方の視点を提示する。 ○交流することで自分の感じ方と違うものに注目させて、再度聴く時の新たな視点にできるようにする。 ○曲名、作曲者、曲について簡単に説明し、鑑賞の視点が広がるようにする。	鑑賞：様々な楽器の音の特徴に気付いたり、音楽を聴いて思いを浮かべたり風景を想像したりしながら、音楽全体のイメージを感じ取って聴く。 [表情や態度の観察][ワークシートの記述] ◎イメージの広がり 感受：感じたことを友達と話し合うことによって、様々な感じ方があることを知り、新たな視点で感じ方を広げようとしている。[表情や態度の観察][ワークシートの記述][グループでの活動の様子] ◎新たな視点の気付き
見直し	4	◎「越天楽」を聴いたり、「越天楽今様」を歌ったりして、日本の音楽の雰囲気を感じ取る ○「越天楽」を聴いて楽器の音や曲の感じから思いを浮かべたり風景を想像したりし、感じたことを短い言葉で付箋紙に書く。 ○友達の発表を聴き、感じたことを参考にしながら再度音楽を聴く。 ○雅楽「越天楽」について知る。 ○「越天楽今様」を聴いたり歌ったりする。	○自分の感じ方と違うものに注目させて、再度聴く時の新たな視点にできるようにする。 ○雅楽について簡単に説明し、映像による視聴をする。 ○雅楽「越天楽」と「越天楽今様」との共通点や相違点を感じたりイメージを重ねたりしながら鑑賞できるようにする。 ○自然な無理のない声で歌えるようにする。	関心：環境音を聴く活動で行った感じ方を鑑賞に生かしながら、関心をもって聴こうとしている。[表情や態度の観察][ワークシートの記述] ◎集中、楽しく聴く態度 感受：感じたことを友達と話し合うことによって様々な感じ方があることを知り、感じ方を広げようとしている。[表情や態度の観察][ワークシートの記述][グループでの活動の様子] ◎いろいろな視点からの記述
表現する	5	◎環境音から想像した思いや風景を「越天楽今様」で表現する ○グループの思いが伝えられるような楽器の組合せや歌詞を考える。 ○どのように表現を工夫するのか、工夫するポイントを話し合う。	○楽器の組合せ、演奏の構成や奏法など、工夫するポイントを示す。 ○グループの思いが伝えられるような楽器をグループに応じて準備する。	感受：自分の表現したいことの思いやイメージをもち、楽器の組合せや多様な表現の仕方を考えている。 [話し合いの態度や発言][ワークシートの記述] ◎いろいろな発想の発言と意見の調整
見直し	6	◎自分なりのイメージの追求をし、表現の工夫をしながら練習する ○練習計画や目当てに沿って、自分なりの表現を工夫しながら練習する。	○いろいろな奏法を支援する。 ○うまく練習できなかったり、演奏につまずいている児童には相談のったり一緒に演奏したりする。	関心：自分のイメージを表現するために、目当てをもって意欲的に練習に取り組んでいる。 [表情や態度の観察][演奏への取組] ◎自分なりの工夫を加えた練習
見直し	7	◎曲の構成、音色、音のバランスなどを考え、グループで協力して練習する ○個人やグループで決めた練習のポイントに沿って練習する。 ○発表に向けて通して練習し、うまくいかなかった所を改善する。	○自分たちの工夫点や、伝えたいイメージが分かるように演奏されているか、などの練習ポイントを確認する。	技能：声や楽器、環境音などを組合せ、曲の構成などを工夫して多様な音楽表現を楽しんで演奏している。 [演奏の工夫][交流での意見][ワークシート] ◎表現の追求をしながら楽しく演奏
見直し	8	◎表現を工夫しながら演奏発表をしたり、各グループの表現を感じ取りながら楽しく聴いたりする ○「越天楽今様」の演奏を発表し合い、聴いた感想を交流する。 ○学習全体のまとめをする。	○演奏の仕方や表現の工夫など、よいところを見付けられるようにする。 ○各グループの表現意図を感じ取りながら聴くようにする。	技能：声や楽器、環境音などを組合せ、曲の構成などを工夫して多様な音楽表現を楽しんで演奏している。 [演奏の様子][ワークシートへの記述] ◎グループ全体の様子をつかみながらの演奏

VI 研究の結果と考察

1 環境音を意識して聴いたり、音を聴いて思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行い、感じたことを友達と交流したことは、音を聴く楽しさを感じ、音を聴くことへの関心を高めることに有効であったか

まず、生活の中のあらゆる音を聴き取る活動を行った。初めに音楽室で耳をすませて音を聴き取る活動を行ったところ、一番大きな音であった川の音は聴き取れた児童が多かったが、一瞬で消えた音や、かすかな音までを聴き取れた児童は少なかった。抽出児のA男とB子は資料1の活動1に見られるように、それぞれが違う音を聴き取っていた。その後、友達の発表を聞き、聴き取れなかった音を赤でワークシートに書き足した。次に玄関で同じ活動を行ったところ、初めよりも意識が高まり、聴き取りにくい音までもよく聴くことができ、いろいろな音をワークシートに書いていた。音を聴く活動についてA男は「意識することによっていろいろな音が聞こえた。」と感想を書いていた。友達の発表を聞き、気付かなかった音を赤で書き足したことから、音を聴く活動で何か気付いたことはないかを問うと、「身の回りには物音が結構あるんだなと感じた。」と、新たな感想も書けたので、自分が意識して聴いていない音がたくさんあるということに気付けたようであった。

この活動をもとに、環境音（河原で鳴く虫の声）を聴いて、思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行った。児童は先程よりも更に真剣に音を聴き取ろうとしていた。その中で聞こえる川の流れる音や虫の鳴く声などの音から、A男とB子はそれぞれ資料2の1回目ような内容を付箋紙に書いていた。次に、グループで付箋紙を持ち寄り、それぞれが感じたことを出し合う活動を行った。活動後、友達が感じたことで自分が感じ取れなかった意見に目を向けて、それを参考にしながらもう一度聴いてみた。その結果、同じ班に属するA男とB子は、それぞれが感じたことを参考にしながら、新たな視点で聴くことができたと思われる意見が書かれており、感じ方が広がった様子が見られた（資料2の2回目）。活動後、他の児童は、「いつも聴いている音でもよく聴くといろいろなイメージがわいてくる」「もっと耳をすませて音を聴きたい」「音を聴くっておもしろい」などの感想を述べており、生活の中にあるたくさんの音の発見や、想像を広げながら音を聴くことの楽しさを感じたようであった。

以上のことから、環境音を聴いて思いを浮かべたり風景を想像したりする活動を行い、感じ

資料1 生活の音を聴く活動についてのワークシートの内容

活動1 音楽室で聴き取った音

A男	B子
<ul style="list-style-type: none"> 消しゴムのかすをほらう音 せきをする音 川の流れる音、歩く音、声、えんぴつを置いた音、いすの音 鼻をすする音 	<ul style="list-style-type: none"> 川の水の音 先生が歩く音 消しゴムのかすをほらう音、声、シャープペンのしんの音、えんぴつを置いた音

活動2 玄関で聴き取った音

A男	B子
<ul style="list-style-type: none"> 鼻をすする音 キャップを落とす音 人の声 えんぴつで書く音 歩く音 車、紙、車の水はね、自転車、書く音 	<ul style="list-style-type: none"> 紙がずれる音 声 足音 車の音 えんぴつで書く音 シャープペンの音 車が水をはねる音 自転車のブレーキの音

・は児童が聴き取った音
○は友達の発言を聞いて赤で書き足したもの

資料2 環境音を聴く活動についてのワークシートの内容

A男

1回目 聴いた音から思いを浮かべたり風景を想像したりしてみよう

たき	自然の中にある感じ
森のおく	

★話し合い★

2回目 新たに感じたことを書き足してみよう

緑ゆたか、秋から冬へ向かう時、ダム

B子

1回目 聴いた音から思いを浮かべたり風景を想像したりしてみよう

ダムの水がいきあひよく出る音	草をとける音
鳥の声	

★話し合い★

2回目 新たに感じたことを書き足してみよう

キャンプに行った時の思い、暴風、草がゆれる音。

たことを友達と交流したことは、音を聴く楽しさを感じ、音を聴くことへの関心を高めることに有効であったと考える。

2 日本の音楽を聴いて思いを浮かべたり風景を想像したりし、友達と交流して感じたことをまとめたことは、聴き方の視点や感じ方が広がりにイメージをふくらませながら、心で感じ取ることに有効であったか

「春の海」の鑑賞において、環境音を聴く活動と同じように、音楽を聴いて感じた思いや浮かぶ風景を短い言葉で思いつくまま付箋紙に書く活動を行った。A男は音楽を聴くとすぐに鉛筆を走らせ、聴き終わるころにはたくさんの内容を書いていた。B子は真剣な表情で聴いており、慎重にイメージを広げながらじっくりと書き込んでいるようであった(資料3)。二人のワークシートには、聞こえた楽器の音や感じた思い、日本の文化に関することなど、たくさんの内容が書かれていた。さらに新しい視点を見付けられるように、「どんな季節のどんな風景が浮かぶかな」と問いかけ、課題意識をもたせてからグループでの交流をさせた。

グループの交流では友達の感じ方に共感したり違いを発見したりしやすいように、一人一人が持つ付箋紙の色を変えた。そして、「聞こえた音」と「音から感じた思いや風景」という項目に分けて付箋紙を張り、更に同じ内容ごとに仲間分けをする活動を行った(資料4)。活動中には、「同じだ」「一つだけ違うものがある」などの言葉が飛び交い、意欲的に交流する姿が見られた。この活動によって、様々な感じ方があることが分かったようである。交流後に、伏せておいた曲名、作曲者、曲についての説明を加え再度鑑賞したところ、季節をイメージした内容や曲の説明を意識して感じ取ったことなども書かれていた(資料3の波線部)。A男は「友達のを見て新しい感じ方ができた」、B子は「友達の付せん紙を見て、それからどんどん感じが広げられた」という感想を書いており、交流により感じ方が広げられた様子が見られた。

思いを浮かべたり風景を想像したりして聴く活動について、事後アンケートの感想では、「自分の気持ちががすらすら書けた」「自然の中にとけ込むような気がする」「いろいろな想像力が働く」「楽しく、わくわくしてくる」などの意見が多く、全員が「よかった」という感想をもつことができた。

以上のことから、日本の音楽を聴いて思いを浮かべたり風景を想像したりし、友達と交流して感じたことをまとめたことは、感じ方の共感や違いが確認できたことから、聴き方の視点や感じ方を広げることができ、心で感じ取ることに有効であったと考える。

3 環境音から浮かべた思いや想像した風景を、歌や楽器で工夫して表現し、表現したものを聴き合う活動を行ったことは、日本の音楽を身近な音楽としてかかわりながら、深く感じ取ることに有効であったか

まず、グループごとに自分たちの好きな環境音を選んだ。A男とB子のグループが選んだ環境音は、「風と水」であった。その音から浮かぶ風景や思いは、「春、桜の花びら、川の流れ」であった。これを「越天楽今様」の旋律に当てはまるように歌詞にして、自分たちのイメージを歌と楽器で表現した。歌詞と音の組合せや演奏の構成などを話し合い、歌詞カードに自由に

資料3 抽出児のワークシートの内容

1回目：聞こえる楽器の音、音から思いを浮かべたり風景を想像してみよう	
A男	B子
こと、和風の旅館、日本風、おきなわっぼい、本店、書道茶道、代、旅人、和風のでかい家、たたみ	ふえ、かぶきが始まる感じ、おこと、しゃみせん、和風のお店に流れてそう、な曲、日本ふうをおどっている人がうかぶ
↓ 交流 ↓	
2回目：もう一度聴いて新しく感じたことを書き足してみよう	
さみしい、おどる、まう、ちる、さくら	着物、せんす、昔の道、と、ころ、ころの音が海の波のよった

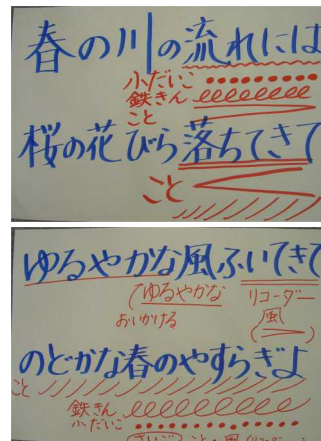
資料4 付箋紙を使って感じたことを交流している様子



書き込み、それをもとにして自分なりのイメージで演奏するための工夫に取り組んだ(資料5)。

A男は春風のイメージをリコーダーで表現することになり、演奏の工夫点を「音の大きさを少なくして、やさしくふく」とした。しかし、なかなか思うように音のイメージがつかれないようだったので、弱い音やはっきりとした音などいろいろな音の出し方について吹いて見せて、息の使い方についても支援した。B子は川の流れる音を小太鼓で表現しようとしており、工夫点を「音は弱くしてゆっくり流れるように演奏したい」と間をあげながら弱い音で流れを表していた。そこで、歌舞伎で使われる、太鼓でいろいろな水音を表す技法についての話をしたところ、「もう少し流れを出したい」と、あまり間をあげずに一定の間隔で打ち始めた。発表後の聴き手の感想では、桜の舞う川が想像できた、川の流れる様子が似ていた、落ち着きがあって春の景色の様子が浮かんだ、箏の花びらが散る様子と川の流れが合っていた、リコーダーでの風の表し方がいい、などの意見が出て、春の景色の様子が十分伝わったようであった。越天楽今様を表現する活動後、B子は「歌詞を考えたり楽器を使って表現したりすることで、より感じ方が広がった。」と感想を書いていた。各グループでつくった歌詞の内容からは、身近な風景ばかりでなく、日本の自然や文化にも目を向けていることが分かった。

資料5 グループで考えた歌詞に楽器の組合せや構成を書き込んだもの



また、「何を表現するかを考えたり、その音に近付けて音を出す工夫をすることで、もっと音楽を深く考えようとする。」などの意見を書いている児童もみられたことから、自分たちの思いを表現することで、より深く日本の音楽を感じ取ることができたようである。

以上のことから、環境音から感じた思いや想像した風景を、歌や楽器で工夫して表現し、表現したものを聴き合う活動を行ったことは、日本の音楽を身近な音楽としてかかわりながら、より深く感じ取ることにも有効であったといえる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

- 環境音を聴く活動を鑑賞や表現活動に関連させたことで、鑑賞や表現の活動においても環境音を聴く活動を生かしながら自由に思いや風景を浮かべることができた。これは、日本の音楽を身近な音楽として心で感じることができ、日本の音楽への関心を高めることにつながった。
- 音や音楽から、イメージを自由に浮かべられるよう、感じたことを思いつくまま短い言葉で書いて交流したことは、いろいろな視点で感じ取ることができ、イメージを広げる上でも効果的であった。また、児童の生き生きとした活動の様子からも、豊かにイメージを膨らませながら音や音楽を聴くことの楽しさを感じたようで、鑑賞の一方法として効果があった。
- 事後アンケートから、また聴いてみたい、また勉強したいなど、日本の音楽について興味関心をもった児童も多いことが分かった。今後は、様々な日本の音楽にかかわり親しめるように、学年に応じて系統立てた指導の工夫について検討していきたい。

〈参考文献〉

- ・小島 美子 著 『日本の音文化』 第一書房(1994)
- ・峯岸 創 監修・編 『日本の伝統文化を生かした音楽の指導』 暁教育図書(2002)